ある恋愛の顛末

牧草　泉

「短期間の多くの愚かさ――それが君たちの間では恋愛と呼ばれる　そして君たちの結婚は短期間の多くの愚かさに終わりを告げさせる――一つの長期間の愚かさの開始のために」

・・・ニーチェ

一.

彼女に初めて会ったのは、市民劇場のコンサートホールだった。私はコンサートホールC席で偶然に彼女を見たのだ。彼女にとって重要なことはその偶然だった。別にコンサートホールでなくとも、ディスコでも野球場でも、彼女にとっては同じことだったと思う。

今思うと、薄明りのコンサートホールで彼女と会ったのは、彼女と私の将来に対する一種の伏線だった。この目で確認したことが結局幻覚に過ぎなかったという点で、私はその後長い間洞窟の囚われの身となったのだ。彼女は、私とどうして会ったのか？　と聞かれると、恐らく微笑みながら次のように答えたに違いない。

「全く偶然だったのです」

必然は偶然の関数だという説がある。一体何回の偶然が重なれば必然になるのか？　Xは定数ではない、変数だ。それは人によって異なる。しかし、男女が恋愛感情に支配されると偶然は必然へと加速する。

恋愛に対するロマン的想像は、偶然が必然へと飛躍するのに必要な活性化エネルギーを限りなく小さくする。それは量

子論のトンネル効果と同じだ。素粒子は大きな障害を軽々と通過する。

恋に落ちた二人は、ただ一回の偶然さえも必然だと美化する論理的飛躍をためらわない。しかし彼らを責めることはできない。もともと男女間の愛情は非論理的な飛躍に基づくものだからだ。

ブレヒトは言う「誤りは連鎖することによって真実の幻想を生む」と。限りない誤解の積み重ねが恋愛という幻想へと化身する。

二.

私と彼女が会ったコンサートホールは、今は音響効果抜群の瀟洒なコンサートホールに生まれ変わっている。私はそのときの曲目をほとんど覚えていない。「運命」、「月光」、「田園」「トルコ行進曲」「悲愴」などだったと思う。ほかの作曲家の曲も組まれていたことは確かだが、どれもうろ覚えだ。

彼女は私を詰問する。「ベートーベンが好きなのにどうして曲目をはっきり覚えていないの?」そうして機会あるごとにすべてを思い出させようとする。しかし思い出すのはそのときだけで、時が経ってしまうとまた忘れしてしまうのだ。彼女は些細なことまで記憶力抜群だ。二人が初めて顔を合わせたコンサートホールの座席番号から、私自身も覚えていないその日の私の衣装まですらすらと口にする。「あなたはその日、紺色の上着にピンクのカッターシャツを着ていたわ。私がどんな衣装だったのか覚えてる?」

自分の内心を正直に表出するのは恋愛の失格者だ。恋愛には想像力を必要とする。私は彼女にささやくように言う。「君はその日ピンクのセーターに桔梗の図柄の入った薄紫のスカートをはいていた。そのときの格子模様の上着はよく似合っていたよ」

その日の彼女の衣装は、私の記憶の中で泉のように脳裏に浮かび上がって溢れ出てくるのだ。そうして淀みなく流れて事実から少しずつ遠ざかる。しかし彼女は私の嘘に素知らぬ振りをして目を閉じる。さらにはその虚構を楽しむことまでもする。もともと彼女が望んでいたのは事実ではなく〈思いやり〉だったのだ。甘い愛の囁きであれば嘘でもかまわなかったのだ。

三.

ベートーベン以外は、作曲家は誰だったのか、どんな曲だったのか覚えていないけれど、それがセミ・クラシックだったことは確かだ。その証拠は私が退屈した記憶がないからだ。私が彼女との出会いの状況を聞かれるとき、そのときの曲は作曲家とともに変わる。ショパンの「雨だれ」であったり、リストの「ハンガリー狂詩曲」であったり、時にはチャイコフスキーの「白鳥の湖」になったりする。私のおぼろげな記憶の中にはどんな作曲家もどんな曲も漫然としてしか入って

いないのだ。もっともクラシック・マニアではないから限られた作曲家や曲目でしかないのだが・・・。

そんな出会いの状況を知りたがるのはたいてい女性で、彼女らは、私の出会いの話にロマンの痕跡を執拗に探し出して自分をオーバーラップさせて酔いしれる。そうして私の話を離れて自分たちの話題へと移行させる。私と彼女の出会いの状況説明は彼女らにとってマッチのようなものだ。点火の役割を担っているに過ぎない。私も心得ているからいい加減なところで話を打ち切る。

しかし彼女らの話は途切れることはない。話が進むにつれてロマンチックな雰囲気はいやが上にも増幅されていくのだ。彼女らの口からは好みの作曲家や曲がぽんぽんと飛び出してくる。しかし長くは続かない。話題は音楽から映画やドラマへと急シフトする。よほどのクラシック・ファンでない限り、音楽で会話が続くことはあり得ない。そのことを彼女ら自身も知っている。彼女らに「造詣が深い」という言葉は親しまないのだ。

なかには、私の話の論理的誤謬を問い詰める論理的な女性もいる。そのコンサートは本当にあったの？　本当にその曲だったの？　また私の話を聞いても、気乗りしない表情を見せて私を興ざめにさせる女性もいる。しかし彼女の心情が分からないわけではない。もともと私自身がクラシックにのめりこんでいるわけではないからだ。だから私は彼女を恨むことはしない。

四.

過去は現在の証人だ。現在の証明に必要な証拠を全て有しているが、それ以外は何もないほうが過去はもっと美しい。過去を振り返るとき、その取捨選択は不可能だ。しかしそれを覚悟で私がおぼろげな黴だらけの記憶を手探りして一所懸命に過去を捜し求めるのは、現在の私がどうして存在するのかを自分自身に説明するためなのだ。

その日、F市では一体どんなことが起きていたのか。私がなぜ芸術劇場に行ったのか。

あの時、私は友人からチケットを貰ったのだった。

「俺は急に裁判所から呼び出しが来たのでコンサートに行けなくなった。お前、よかったら行かないか？」

という電話が友人からあったのだ。私はベートーベンと聞いて一も二もなく貰った。私にクラシックの趣味はほとんどない。グスターヴ・ホルストの「惑星」は何度聞いてもわからない。しかしベートーベンは違った。ベートーベンは叙情的な作曲家だ。胸に響くものがあった。

「選挙が近いという噂が流れているんだ。だから、俺は会社まわりをして選挙資金の依頼に行かなくてはならなくなったんだ」

と、友人は言った。当時は自民党が分裂して二大政党への過渡期だった。自民党も新進党も選挙で天王山を決しようと必死だった。彼が秘書をしている代議士は選挙に弱く公認

されるかどうかの瀬戸際だった。だから総動員で党員を募り選挙資金獲得に狂奔していたのだ。その犠牲に友人がなったというわけだった。友人はベートーベンのコンサートのチケットを購入したこと自体、秘書として失格の烙印を押されてもいいほどだったのだ。

彼の口にした会社まわりと裁判所からの呼び出しのちぐはぐにふと矛盾を覚えたが、ベートーベンという友人の口から出た台詞がその矛盾をどこかに吹き飛ばした。その友人は秘書をどうやら勤めおおせて、現在はF市の市会議員をしている。

五.

私は当日いつもと違って早目にコンサートホールに行った。その理由は覚えていない。いつもはコンサートには開演十分前に行くのだ。私が友人から貰った指定席はC席だった。友人の質素な生活が忍ばれた。

「代議士と秘書の関係は徒弟制度と同じだ。秘書にとって代議士の言うことは絶対なのだ。代議士の手足となって働くが実入りは少ない。政治が根っから好きでないと務まらない職業だ」これは友人が同窓会で話してくれたのだ。友人は政治学科を出ていて県会議員になるのが夢だった。

C席は三階のステージの真正面だった。一番安い席だ。そこからは演奏者が小さく見える。私はそれでも不満はなかった。「演奏者を見に行くのではない。演奏を聞きにいくのだ」そんな思いだった。私はいつもオペラグラスならぬ倍率八倍の双眼鏡を持って行く。この双眼鏡はディスカウント店で購入したのだ。演奏者を見たければこの双眼鏡を使った。見え具合はオペラグラスに較べても遜色がなかった。

私は自分の席に行った。ところがそこにはすでに女性が座っていた。年頃は私と同年輩で、ホールに流れる音楽に目を閉じて聞き入っていた。私は彼女に声をかけた。

「済みません、ここは私の席なんですが」

私はつとめて穏やかに言った。相手がうら若い女性だったからだ。相手が男性であったならもっと大きな声を出していたに違いない。彼女は振り向きもせず言った。

「あら、ここは私の席ですよ」

自信に満ちた声だった。私は慌てた。私の確信は揺らいだ。私は改めてチケットを取り出すと番号を確かめた。やはり間違いなかった。私は少し声を大きくして言った。

「やはりここは私の席ですよ」

女は初めて私の顔を見た。そうして手提げバックからチケットを取り出すとまじまじと見た。

「あら、私の見落としだわ。隣なんだ」

彼女は立ちあがると、隣の席に移動した。私は、彼女の顔をゆっくり見ることができた。照度を落した空間に彼女の顔が浮き上がって見えた。美しい表情だった。私はその顔よりも彼女が隣の席に移動する時に見えた脚にひかれた。なま脚だった。ストッキングのコマーシャルで見たモデルの脚と

同じだった。

六.

欧米の小説は登場人物を仰々しく描写する。鼻筋が高いとか、頬が突き出ているとか、瞳がどうのとか、衣装、履物、果ては話しぶりまで、まるで写実主義にでも被れたように大げさに描写する。読む方がうんざりする。これは進化論と産業革命による悪影響だ。進化論はしたたかに生き残りアメリカを悩ませている。産業革命も二十一世紀に入っても延々と続いている。電気店に行けばその進行状況が素人でも理解できる。パソコンは三ヶ月ごとに新製品がつくりだされ店頭に並ぶ。

人間が産業革命の走狗となって踊っているように見えるが、もともと科学は人間の活動の産物だ。プレハーノフの「人間が歴史を動かす」という主張は正しい。人間の意思は集団化するにしたがって限りなく個人から乖離して行く。しかし無機物となるのではない。あくまでも人の意思である。

女性の容貌、性格は描写すれば限りがない。だからここでは十九世紀的写実主義を模倣しない。

照度の低い空間で彼女は燦然と美しく映えていた。彼女は、一緒に肩を並べて公園を散歩したいという衝動を私に起こさせるに十分な美貌を備えていたということだ。

七.

恋愛は誘惑から始まる。動物の世界では外形的には誘惑は雄がリードする。雄が華やかな外貌をしているのは雌をひきつける手段だ。しかし内実は雄、雌いずれも性ホルモンを出して相手を誘惑する。種族を永遠に連続させようとする神から与えられた本能なのだ。

人間の場合、外形的にも誘惑は男の占有物ではない。男と女はいずれも言葉を利用してその誘惑の力を倍加させる。人が性欲を常時所有している原因は言語の利用にある。言語の発明によって性欲の日常性が獲得されたのだ。

種族保存の原理に適した愛の表現が歴史的に維持され、種族保存に役に立たないものは捨てられ消えていった。この場合進化論の「使用・不使用説」は正しい。だから、現在愛の表現として用いられる言語は誘惑の手段として効果的なものだ。

種族保存というのは単なる生物学的保存に留まらない。社会的種族保存も意味しているのだ。生物学的種族保存方法であっても、その方法が社会的種族保存に親しまなければ自然淘汰されていく。社会の根幹を混乱させない範囲で最適化された愛の方式だけが生き残るのだ。愛の常套性は慣習と制度から始まる。愛の表現は多分に保守的なのだ。

八.

言葉は、愛の表現の手段としては最適なものだ。誤解される場合もあるが、他の手段より率直に自分の思いを相手に伝

えることができる。言語がない時代の恋愛は目付きや性的行動が異性を誘惑する手段だったのだ。

しかし言語が発達してくると、その誘惑の役割は言語がとって代わる。言語の使用が誘惑成立の主要条件にシフトしたのだ。だから眼差しの神話に溺れることは避けるべきだ。「コーヒーでも一杯どうですか？」この常套的な言葉はもちろん有効だ。人間はたいていこの言葉の近辺で誘惑する。「コーヒーでも一杯・・・」で、コーヒーはお互いの秘めた視線とその空間の真空部分を満たしてくれる。そうして親密な雰囲気を醸しだす。またウェイトレスがもってくるコップ一杯の水は、時として顔を出す二人の間の厄介な沈黙を取り除いてくれるのだ。

フランス映画で、主人公が好きな女性に対して雪の中を転げまわって愛の表現をするシーンがあった。それだけなら言語がなかった時の愛情の表現、つまり性欲行動を手段とした愛情表現と変わるところはない。しかし主人公はその行動の中に言語を十分に使っていた。この主人公の愛情の表現も「コーヒーでも一杯どうですか？」の代替表現なのだ。

九.

誘惑は曖昧だ。想像を刺激しなければならないからだ。コンサートホールでのささやかな彼女との接触。この接触を彼女はどう解したのか？　この偶然の意味は果たして何なのか？　彼女は自らの誤りを詫びて席を空けた。「コーヒーでも一杯どうですか？」の突発性を減少させるという点で、彼女の言動は賢明だった。私も彼女の過誤を宥恕して紳士的に振舞った。ということはその突発性を低めるために私も一役買ったのだ。

第一部の演奏が終って休憩に入った時、彼女は私の顔を覗き込むようにして再び謝った。私は前より一層やさしく応じた。しかしどんな言葉を用いたのか覚えていない。彼女に聞けば細大漏らさず覚えているはずだ。彼女は席を立った。私はそっと彼女の脚を盗み見た。やはり美しかった。

彼女は演奏中熱心に聞いていた。私はベートーベンを聞きながら彼女の様子を時々盗み見した。ベートーベンに彼女がどれほど心酔しているかは知るよしもない。しかし彼女の態度から見ると、ベートーベンへの傾斜は単なるまやかしでないことは確かだった。私は安心した。それと同時に少し警戒心を持った。私よりベートーベンに詳しくあっては困ると思ったからだ。女性に虚勢を張りたがるのは男の証でもあるのだ。私も例外ではない。

彼女は最後までベートーベンをたんのうした。私も途中少し眠くなったが我慢して有終の美を飾った。室内が明るくなった時私は彼女に言った、

「お茶でも一杯どうですか？」

彼女は頷いた。そこには日本海溝のような懸隔は全くなかった。大陸棚がなだらかに陸地へと続いていた。「トンネル効果」は間違いなかった。二人は恋愛のスタートラインに

並んだのだ。

十.

次の土曜日私と彼女は映画館に入った。最近映画はほとんど見ない。だから何年ぶりに映画館に入るのだろうと思いながら招待券を受付に差し出した。中年の女性が私をチラッと見て丁寧に受け取った。

レストランで彼女は映画の招待券を差し出すと「よかったら、いっしょに行きません?」と言って私を誘ってくれたのだ。席を間違えたお詫びだった。チケットには「名画鑑賞会」と印刷されていた。

映画はオムニバスで三遍からなっていた。題名は覚えていない。モノクロの古い作品だった。一遍だけはいまでもストーリーを追うことができる。

北陸の小さな旅館に中年の男性と若い女性がそれぞれ宿泊する。廊下ですれ違ったことが縁で食事を共にする。男は会社で金を使いこみ、どうにもならなくなって自殺しようとやって来たのだった。女は失恋の痛手に耐えきれずやはり自殺の目的でこの旅館に宿泊したのだ。二人は一夜を語り明かす。お互いにもう一度やり直そうと誓って二人は別れる。

いい映画だった。こういう映画の招待券を持っていたことで彼女の性格を知ることができるのだ。

レストランでは私は彼女にプレゼントすべき何物も持っていなかった。私は映画の招待券を思い出しながら考えた。招待券に等しい価値の贈り物を。この時すでに二人の取引は巷の交換経済の原則とはかけ離れてしまっている。資本主義の枠からはみ出しているのだ。

恋愛の初期、女性に贈るささやかな品物（たとえば夜店で売っているネックレスなど）の使用価値は交換価値によって決定されるのではない。ネックレスを買う時の男の明るい表情と細やかさを想像して彼女は男にひかれていく。交換経済の法則を無視している点では資本主義の敵は共産主義経済ではなく恋愛という虚構だ。

十一.

「私は家庭と仕事を両立させたいわ」

彼女は言った。彼女のこの言わずもがなの注釈は、私の好意に対するカモフラージュだ。自らの欲望を隠蔽するアリバイ作りだ。女は巧妙だ。このことが彼女の意図のあいまいさを増幅する。意図の曖昧さは誘惑の引力を強めこそすれ弱めることはない。相手に対する罠だ。私はこの彼女の一言にさらに惹かれた。誘惑が膨らんだのだ。

「恋愛は騙し合いだ」というフランスの諺を思いだしながら、私は彼女をレストランに誘った。彼女は快く応じた。恐らく彼女の脚本にもレストランの風景が折りこまれていたにちがいないのだ。彼女の背丈は一六五ｃｍほど。均整のとれたスタイルだった。

そう、コンサートホールであってから三週間が過ぎていた。

私は予感した。この女性と結婚することになるだろうと。その一方、私は急にこんな考えにとらわれた。この女性でなければならない必然性は何なのか？　と。

十二.

彼女の専攻は心理学だった。精神科や心療内科で研鑽を積んで、心理学研究所を開きたいと言った。「研究所といっても相談所なのよ」と直ぐに言い改めた。なぜ研究所を相談所に修正したのか分らない。私は少し気になった。

「なぜ心理学を専攻したの？」

と私が尋ねると、

「マン・ウオッチングがしたかったの」

と答えた。さらに付け加えて言った。

「人の脳は宇宙より広い世界なのよ、その宇宙を飛び回りたかったの。医学の世界は人体がその対象よ。部分的じゃない？　私が駆け巡りたいのは無限の宇宙なのよ。そうであれば心理学以外にないのよ」

返事は明確だった。分りやすかった。彼女の答えは自信に満ちていた。自分に対する自負心からにじみ出た確固としたものだった。

「人間の行動を予測することができると思う？」

と彼女が尋ねた。私はそんなことは考えたことはなかった。私は正直に答えた。

「考えてみたことはないよ」

「それなら今考えてみてよ」

彼女が言った。

「そんなこと急に言われたって分らないよ」

「私は人間の行動を予感できるようになりたいのよ」

彼女は窓の外を遠く眺めながら言った。私は心理学の裾野の広さを想像する。彼女はさらに付け加えた。

「でも現代はマシンに人間が支配されている．コンピュータに支配されている。異常な世界なのよ。人間は人間が支配すべきなのよ」

彼女は私の目をじっと見つめながら言った。彼女の瞳は輝いていた。

でも私は彼女の言ったことに疑問をもった。今は人間が機械を限りなく人間に近付けようとしているのではないのか。ファジーな行動をするロボット、人間と会話をするロボット。主体的に人間が機械を支配しているのだ。機械はやはり人間の僕だ。ロラン・バルトは言う「人間が機械を人間化しつつある」と。

私は彼女の顔に新しい発見をした。彼女の鼻が普通より少し上を向いていることに気がついたのだ。私は今まで気がつかなかったことを恥じた。鼻腔は彼女が力むたびに大きくなったり小さくなったりした。

彼女がカウンセラーとして患者や相談者と対峙する時も、この二つの鼻腔はせわしく開閉するのだろう。だからといって彼女の鼻腔が私に不快感を与えたわけではない。彼女の美

しい脚と鼻腔。この二つが私の頭から離れなかった。

十三.

私は彼女が研究所で頭を掻き毟りながら研究に没頭している姿を想像した。フロイトを読みふける、あるいはユングの夢の研究に打ち込む彼女を想像した。

人間が異性に引かれるのは相手の全体像についてではない。部分的に惹かれる場合が多い。ある著名な作家は愛する女性に対して「あなたのすべてが好きです」と言ったそうだ。しかしこれは誘惑の作業として言ったのであって、作家特有の嘘言だ。

愛する相手のすべてが平等ではなく、部分部分で愛の強弱があるのが普通だ。だからそれが鼻であったり、唇であったり、脚であったりする。さらに言えばスカートをはいた姿であったり、スラックスのスタイルであったりする。浴衣姿だって美しいではないか。私は研究所で一心不乱に心理学を極めようとしている彼女の姿を想像した。

十四.

人間の世界では男女間の愛に友情の入りこむ余地はない。友情は選択的な感情が存在しても可能だ。つまり他人に対して好きなところと嫌いなところが混在しても成立する。しかし、恋愛感情は全てか無かの二分法的感情だ。これとかあれに対する愛ではなく一つでも欠けてはならない全部に対する愛なのだ。恋に落ちると、恋人の頬に生じた吹き出物でも魅力的に見える。

ラ・ロシュフコーは言う「愛は友情より憎悪に似通っている」と。友情は無関心に耐えられるが、愛は無関心に耐えることはできない。つまり愛の反対語は憎悪ではなく無関心だ。

男女間に友情が可能であったら、人類は出現と同時に滅亡したに違いない。進化論も雄・雌間の友情が成り立たないことを前提としているのだ。

十年前、他の女友達に対して一時的であったにせよ私は無関心で接することができた。だから、彼女に対する私の感情は愛であることが明らかだった。恋愛における心情は愛情と憎悪から構成されているのだ。

十五.

プロティノスは言う。「善のイデア、ト・ヘン（一者）が存在しなければ何も存在することはできない」と。彼は一者流出説を唱えてプラトンの二元説を止揚した。

恋愛の初期、この世のすべての善なるものは彼女から流れ出てきた。彼女と関係することだけが無明の暗黒からの開放だった。水上公園は彼女の手をはじめて握った場所だった。トム・クルーズは彼女が好きな俳優だった。何度か付き合ってトム・クルーズの映画を鑑賞した。X店の甘口カレーは彼女のひいきだった。リチャード・クレイダーマンの「渚のアデリーナ」は、流行は過ぎていたけど、彼女とはじめてキッ

スしたとき流れてきた曲だった。
私は彼女の鼻腔を盗み見しながらキッスした。私にとって鼻腔はまさに善のイデアだった。私の体内から発するエネルギー線はすべて彼女に収斂した。宇宙の中に彼女一人しかいなかった。彼女が鼻の整形手術をして私のまえに姿を現すまでは。

十六.

私はニュートンの第三法則を彼女に説明する。彼女はいぶかしげな表情をする。心理学を専攻した彼女にははるかに遠い法則だ。
「高校で習ったじゃないか」
「そんなもの習ったかしら?」
彼女は一層怪訝な表情をする。それでも私は続ける。人間の生活に必須の法則だと言って。
「君の体をぼくが押すとしよう。そうすると君の体からぼくは力を受ける。ぼくが押す力これが作用だ。君の体が私を押す力これが反作用だ」
私は力んで説明する。やがて彼女は私の意図を理解する。そうして言う。
「でも、まだ作用・反作用を理解するには機が熟していないわ」
私は後ずさりする。私は作用・反作用の法則の説明をあきらめる。
男はセックスを通じて愛を確認しようとする。一方、女性は愛を感じるとき初めてセックスを願望する。男にとってセックスは愛そのものだが、女性にとってセックスは愛の代償である。私が彼女のスカートに手を触れると彼女はきっとして痛烈な言葉を吐いた、
「私を愛してる?」
「当たり前じゃないか」
「どのくらい?」
「宇宙の三乗ほどさ」
「あなたはいつも抽象的なのよ。具体的に言ってよ」
私は現実に突き落とされる。心理学を専攻した女性が幼稚な質問をする。そのたびに私は絶望感に襲われた。
彼女は私の手をさりげなく上に持ち上げる。持ち上げられるにしたがって私の屈辱感は膨らむ。これほどの愛の表現のどこに不満があるのだ? と私は思う。彼女は言った。
「もう少し待ってね。心の準備が必要なの」

十七.

私たちは誘惑のあらゆる手段に思いをめぐらし、誘惑をたんのうしながら一年が過ぎた。そうして二人がホテルに一緒に行くようになって数日後、私は彼女の鼻の向きが変化していることに気がついたのだ。私が意外な表情をすると、彼女は言った。
「整形したのよ」

「手術する必然性があったの？」
「だってあなたって、いつも私の鼻をじろじろ見てたじゃない？」
彼女は私の存在そのものが整形手術の必然性をもたらしたかのように言った。私は「その鼻が魅力のポイントだったのだ」と言おうとして口をつぐんだ。
「でも整形してよかったわ。あなたに感謝してるのよ」
彼女は艶然と微笑みながら言った。私へのコンプレックスがなくなったのか？
自らの個性を誇りに思っている者もいったん恋に落ちてしまうと、その誇りは瞬時にして劣等感に変わってしまう。相手に対する優越感、つまり相手に対する無関心は自分自身への憎悪に変化する。自分の愚かさがいやというほど増大する。相手に対する欲望は幾何級数的に大きくなるのだ。そうして相手の欠点も魅力的だと思うようになったとき、自らの個性は限りなくゼロに収斂する。
恋愛の初期段階では、相手に自分を欲望させるようにした孤高の無関心を自己自身に割愛しなければならない時期に、自分自身をすすんで恋人の視線に合わせようとする。これこそ二人が本当に恋に落ちたという証拠なのだ。しかし、その証拠によって彼または彼女の魅力は急激にしぼみ始めるのだ。
私は整形前の彼女への郷愁に悩まされ始めた。キスをするときも彼女の上向きの鼻腔を見て心の安定感を得ていた。のっぺりと長くなった鼻、キスをしながら私は考える「どこにシリコンを入れたのか」、「何処を削除したのか？」と鼻の周囲を探しまわす。にきびの痕さえメスの傷跡のように見えるのだ。キスに没頭できない愛は満たされぬ愛だ。いずれ色あせていく。
私にとって、彼女の脚の美しさと鼻の整形のベクトル和はゼロだった。私は鼻が元通りになることを願った。彼女ののっぺりとした鼻を見るとユダヤ人を想像する、そして教養小説を。さらに教養小説からヒットラーへと妄想は進んでいく。そうして私は身震いする。
しかしそれを言い出せないままに彼女と別れた。仮に彼女が鼻を復元したとしても、いずれは別れたと思う。私と彼女はカルネアデスの板にしがみついていたのだ。

十八.

男女間の愛は、よく考えてみると相手に対する愛ではなく相手を愛することに対する愛であることが多い。恋人と別れるとき彼が耐えられないのは、彼女を失ったという悲しみではなくて愛を失った悲しみだ。私の愛も彼女に対する愛情ではなく、愛することに対する愛だった。
彼女が去った後、私の心に空洞ができたのは、彼女がいなくなったからではなく、彼女の私に対する愛情行為が望めなくなったためだ。風邪を引いたときに私の額に当ててくれた彼女の温かい手、仕事で落ち込んだときに励ましてくれた時の彼女の表情、食事をしたとき、私の口に付いたカレーのル

ーをティッシュペーパーで拭い取ってくれたその仕草、私がほかの女性に目をやったときの脇腹をつついたときの彼女の嫉妬心。

別れるとき彼女は言った、

「もう一度自分探しをしてみるわ。でも、またいつか会いたいわ」

十九.

「自由とは自己以外なにものも欲しないことだ」これはヘーゲルの言葉だ。肉体関係を通じて彼女の愛を確認しようとすればするほど、私は自らを恥じて身を震わせなければならなかった。彼女に執着すればするほど彼女の生理周期に、彼女の雰囲気に、彼女のコンディションに、さらには彼女の意思に隷属することになった。私の存在が零に収斂していくのをはっきりと認識した。

私にとって、やはり鼻の整形が彼女に対する愛を減少させた。本来人格と肉体は一体であるべきだった。彼女の人格と肉体は鼻の整形によって二分された。人格の伴わない肉体は無機物と同じだ。いや腐敗した死体だ。私はその腐臭に絶えられなかったのだ。私は見た。二人の間にあの巨大なアフリカ地溝が横たわっているのを。

私は言った。「ぼくは君の少し上向きの鼻が好きだったんだ」その声は自分でも驚くほど震えていた。彼女も驚きの表情を見せた。考えて見るとそれが彼女に対する最初の〈愛の告白〉だった。誘惑の一手段であるはずの言葉がずしりと重かった。

二十.

それでも私は彼女を愛した。私の中には心理学に打ち込む彼女が誇らしげに存在していた。しかし整形手術の痕跡がその愛を遮断していた。

二十一.

彼女と別れた後私は自由を獲得した。そうして精神的な自己成長を期待した。

しかし、彼女と別れた後私は胃痛に悩まされた。何か食べると胃が痛んだ。鈍痛、そして激痛。我慢ができなかった。近くの内科医院に駆け込んだ。問診から触診に移りながら医者は言った。

「ピロリ菌の検査をしてみますか?」

ピロリ菌に罹りやすいのは高齢者のはずだ。私はピロリ菌が話題になったとき、本で読んで知っていた。

「若い人も結構ピロリ菌保菌者はいるんですよ」

医者は私の内心を読んだように言った。その表情は胃カメラを私に飲ませたがっていた。私は胃の痛みに耐えきれず、検査をしてもらうことにした。

医者は私をベッドに寝かせると胃カメラの細い管を鼻の穴に差しこんだ。私は瞬間彼女の鼻を思い出した。整形前のそ

して整形後の鼻を、そしてユダヤ人と教養小説そしてヒットラーを。私は身震いした。
「緊張せずに、昔と違って今の胃カメラの管は小指の半分ほどですから何ともないですよ」
医者は私の身震いを胃カメラに対する恐怖感だと誤解してやさしく言った。
私は以前にも胃カメラの経験はあった。その時は胃カメラの管が大きく、ゲーゲーと吐いた。確かに今はそんなことはなかった。管はスムーズに胃の中に入っていった。医者が胃の中をカメラで覗きながら言った。
「胃潰瘍がありますね。かなり大きいですよ。その横に昔患った傷跡もありますね」
「お粥を食べなくてはいけないんですか？」
私は尋ねた。
「余り硬いものは駄目ですね。無理するとこの傷跡も再発しやすいですから、用心しなくちゃね」
私は彼女を思い出した。私の胃は傷ものだ。そうであれば胃を整形したのと変わらないではないか。鼻の整形も胃の傷跡も全く同じ現象だ。見えると見えないとの違いだけだ。
「これがあなたの胃の状態です」
医者が写真を見せてくれた。胃の中は全体として赤みがかつて、胃潰瘍の部分は赤みが強かった。傷跡は少し白っぽくなっていた。
「かなり大きな傷跡ですね」
ピロリ菌の検査は数日後に判明した。やはりピロリ菌がいた。医者は我が意を得たりの表情で薬の処方箋を書いた。

二十二.

私の胃の痛みは薬を飲み始めて急速に改善した。一つは私がお粥を数日続けたことも回復を速めた一因だ。胃の痛みの解放は自由を意味する。彼女の欲望に対する欲望から自由になったことによる開放感、私は自由を思う存分満喫した。
しかし人間の無限の自由は不安を醸し出す。私も例外ではなかった。「また会いたいわ」彼女のこの言葉を私はときどき思い出すようになっていた。

二十三.

あらゆる選択にはすべてそれに見合った対価が伴う。時間を逆行させることは不可能である。だから別れた恋人に対する恋しさを解消するための行為には、一定の障害の克服を必要とする。失望と孤独の回復は現実的な冒険を必要とする。私は別れてから彼女に一切連絡しなかった。自分の自尊心をこれ以上傷つける勇気はなかったからだ。彼女の整形手術を思い起こせば彼女を突き放すことができた。少なくともピロリ菌の検査をするまでは。
お互いがこれ以上自尊心を傷つけることなく会おうとすれば、それは偶然の出会いしかなかった。ところがその偶然が満たされたのだ。彼女はベッド数百十をもつY病院のカウン

セラー部の副部長になっていた。

二十四.

彼女は驚いた表情で言った。

「こんな所で？」

「どうしてここに？」

会った場所は繁華街の側にある大きな交叉点だった。偶然だった。

「元気？」

「元気だよ。君は？」

「元気よ」

慌しい出会いであり、あっけない出会いだった。偶然はこれだけに留まらなかった。

私はD大学の講師になっていた。学生指導部に配置され、大学生活への不適応学生の世話をすることになった。彼女の勤務するG病院が偶然にも大学と連携していた。私はその時カウンセリングの依頼に病院に行き彼女と会ったのだ。交差点での偶然の出会い、そして病院のカウンセリング室での偶然の出会い。時をおかず偶然が重なり合って起こったのだ。

偶然が私たち二人を必然へとまっしぐらに引っ張っていたのだ。恐らく彼女はそんな思いが私よりはるかに強かったはずだ。いくらかの紆余曲折はあったが、結局は婚姻へと突き進んでいった。彼女にとってはコンサートホールでの偶然が続いていたのだ。偶然、いや必然というブラックホールに私も呑み込まれてしまったのだ。

二十五.

別れてから二年ぶりに会った彼女は当然のことだが、まったく他人のように見えた。ヘアスタイルが変わってメイク・アップの腕前が上達し、鼻の整形も余り目立たなくなっていた。

彼女の鼻を見てもユダヤ人、教養小説、ヒットラーの幻覚は生じなかった。もっともそれは私の胃を攻撃してやまなかったピロリ菌のおかげでもあった。私は見にくい傷跡をもつ胃の所有者だった。私は内心ピロリ菌に感謝した。

「これが職場のアイデンティティを主張している衣装なのよ。でも制服って個人のアイデンティティを抹殺していると思わない？」

彼女は笑いながら上着の襟をちょっと立てて見せた。薄いピンクの柄に縦縞模様の線が数本入っているツーピースの制服だった。彼女の雰囲気は以前とは全く違っていた。

「カウンセリングの仕事ってなかなか大変なのよ」

彼女は半分自分に言い聞かせるように言った。「宇宙を覗きたいのよ」と言った彼女の言葉を思い出したが、私は黙っていた。現在の彼女の口から出るセリフではあり得なかったからだ。

彼女には自分の仕事を全うしているという思いがみなぎっていた。彼女の自信感が鼻の整形という異物を従属させてい

た。制服を着て目の前に立っている彼女は美しかった。
しかし制服をしばらく眺めていた私はふとその制服の中にヒットラーを見た。ヒットラーが教養小説の中を泳いでいた。でもそれは一瞬だった。幻覚はすぐ消えた。
私は彼女の指に何も障害物がないことを確かめた。そうして彼女に言った。
「仕事は何時に終るの？」

二十六.

彼女の変身の核心はユニフォームだった。「ユニフォームと個性は両立しない」と言う彼女の主張は正しい。いつの世も独裁者はユニフォームを利用して思想の乱雑さを限りなく小さくする。しかし私は政治の世界にいるのではない。恋愛という極端に狭い空間にいたのだ。
私は彼女と同棲しそして別れた。だから目の前の彼女が以前の彼女であってはならなかった。ユニフォームは彼女の過去を消し去るのに有効な手段だった。そこには今までの彼女とは異なる魅力的な女性がいた。私は彼女に改めて魅力を感じた。乱雑さの減少は人間を惑わす悪魔だった。
私は再び恋愛感情が燃え上がるのが分った。私と彼女の間に横たわっていたはずのアフリカ大地溝は、陽炎のようにゆれていた。私は障害物競走の新しいスプリングボードに立っていた。障害物の高さは低かった。それは私が一時彼女の恋人であったということからくる自信だった。

二十七.

彼女は上司に何か相談した。彼女は上司になれなれしい態度をとった。上司はスマートで知性的な顔つきをしていた。無造作なセーターの着用も似合っていた。私には異常に気になる態度だった。私は彼女のあらゆる行為に無関心であるべきだった。しかし私の心は動揺した。それが私の外部に表れていることも自分自身でわかった。誘惑の一方法である無関心は彼女から私に向けられていた。
彼女は私の存在を無視したかのように上司と話を交わした。私はひどく自尊心を傷つけられた。私の内部に激しい上司への嫉妬心がたぎっていた。
彼女は言った。
「今日は会議で遅くなるわ」
私は携帯の番号を紙に書いて押し付けるように彼女に渡した。一時恋人であったという自信がぐらついていた。
この不安はどこからくるのか？　私は誘惑の主導権を確保できなかった自分をはっきり認識した。彼女の私に対する無関心は動揺がなかった。彼女にとって私の存在が必要条件とはなっていなかった。これは妄想なんだと思いながら，私はその妄想を捨てきれなかった。

二十八.

反戦フォーク歌手ジョーン・バエズは待つこともなく、ま

た待たされることもなくあの戦争の時代を一人で歩き去った。
しかし私はひたすら彼女からの電話を待った。二十四時間が過ぎ、四十八時間が過ぎた。電話はかかってこなかった。
私の心は不安定になった。その不安定の中で、待つことの満たされた後の構図が描けなかった。待つことは不安を伴なう不確定行為だ。相手が来るか来ないか、最高のエネルギー状態、活性錯体の状態だ。恋愛という虚構が消失すれば、そんな目の眩むようなエネルギー状態はありえない。私はその待つ快感にも酔っているのではないか？　そんな思いがした。
私は彼女の上司を思い浮かべた。彼女の恋人ではないか？そう思うと、すると私の頭の中で上司は恋人のように振舞った。二人で向かい合って笑いながら食事をしていた。手を組んで公園を散歩していた。二人でホテルに入る姿まで浮かんできた。私はコキュだった。完全に彼女の領域からはじき出されていた。ニーチェは言う。「自己を嫌悪する者は、自分を嫌悪している自分自身を愛している」と。私は自分自身がいとおしかった。しかし孤独だった。

二十九.

自分にとって不幸な事件は妄想を倍加する。恋愛でも同じである。妄想が連鎖反応を起こして拡大していく。それは壮大な物語だ。彼女と上司の関係は果てしなく続く。「ネバーエンディング物語」のように。
自らが脚本家になり演出し、痴情劇の観客となってしまう。主役の男女は大胆に演技する。私を嫉妬や怒りで盲目にしてしまうのは演じる役者の言動ではなく自らの妄想なのだ。
再会してから五日目に彼女から電話があった。
「ごめんね、遅くなって。仕事で手がはずせなかったの。院長の退職と上司の転職であわただしかったのよ」
私は内心のうれしさを必死で隠し冷静さを装って答えた。
「そうだと思ったよ。ぼくも講義や資料集めで忙しかったんだ」

三十.

レストランで会った私と彼女は過去の傷口を避けながら取り留めのない話をした。お互いに不可侵の領域は一致していた。その中身は違っていたのだが・・・。お互いに操り人形を操っていた。私と彼女は黒子だった。彼女に私が初めて会う人だと思わせようとしたのではなく、彼女が初めて会う人だと自らを欺瞞していた。それは失敗した過去から現在を断ち切るための方策だった。
私には決定論への恐怖があった。過去から連綿と続く舗装された道を、自分の意思に関係なく歩いているような錯覚に囚われたのだ。
神託を知っている観客にとって、オイディプスの苦悩は哀れみを抱かせるだけだ。それは喜劇にもなるのだ。決定論の悲劇は存在のカリカチュアにある。結婚は決定論に忠実だ。しかし恋愛は不確定性から成り立つ現象なのだ。

「神はサイコロをふらないわ」私はこの言葉が彼女の口から出てくることを恐れた。欲望が充足されるとそれは欠乏に変身する。だから欠乏を避けるためには充足を延期させる方法しかない。彼女の決定論的願望から身を避けることで私は恋愛の不確定性を持続させたかったのだ。

三十一.

恋愛の結末には三種類ある。結婚すること、恋人の一方あるいは二人とも死亡すること、そして別れることだ。

ある日、彼女は思いつめたような表情で言った。

「結婚するか別れるか、どっちかにしてよ」

彼女は決定論の確信犯だった。彼女の鋭い眼差しが私を鋭く射ていた。再会してから二年が過ぎていた。恋愛というドラマを演じるのはもういやだという表情がそこにはあった。

私は彼女と別れることはできなかった。ましてや死ぬ勇気もなかった。恋愛の継続という選択肢は私には残されていなかった。結局私は彼女と結婚した。

三十二.

婚姻と結婚は異次元の事象だ。婚姻は法律の世界であり、結婚は社会的関係の世界だ。婚姻は婚姻届を出せば、それで夫婦関係が法律上完全に成立する。法的にはどんな不利益も蒙ることはない。しかし社会的に認知された状態ではない。結婚という複雑怪奇な儀式が要求される。結婚は極めて非生産的な因習だ。結婚という儀式を経験したことがある人はこの定義に異論はないはずだ。

私は婚姻届を出したことで満足した。しかし彼女は婚姻届後の結婚式つまり披露宴に期待して浮き足立っていた。私は披露宴、その後の親戚への挨拶、知人への挨拶、近所への挨拶。まだある。職場での挨拶。考えただけでうんざりした。

婚姻届の書類の上に重石が次々とのせられていく。私と彼女の体に大きなロープがぐるぐると巻きつけられる。この身動きのできない不自由な囚われの身になって、彼女は感激して涙を流した。彼女は以前の彼女ではなくなっていた。得体の知れない化身となって、私の体にまとわりついていた。

結婚という非生産的な因習がなぜ現在まで延々と維持されてきたのか？　その理由は明らかだ。神は自然界に種族保存の本能を与えた。その種族保存をより補強するために結婚という因習が生まれたのだ。

離婚率の増加を抑制する因子は、家庭裁判所や夫婦クリニックや夫婦の家庭への責任感、知人のアドバイスなどでは決してない。結婚という非生産的な因習だ。

ニーチェは言う「神は死んだ」と。しかし結婚という制度だけはしぶとく生き残っていく。

人間の思考空間を狭める結婚という因習。男はなぜやすやすと自らその呪縛に身を委ねるのか？

三十三.

新婚旅行は彼女が手配した。やはり嬉しそうな表情で。彼女はアメリカ行きを望んだ。私は新婚旅行などどうでもよかった。というより行きたくなかった。なぜ結婚すれば旅行に行かなければならないのか？　私には分からない。

「新婚旅行は結婚式の一部なのよ」

だから当然行くべきだという表情で彼女は私を見つめた。私は家で本でも読んで過ごしたかった。彼女は強硬だった。結局上海に落ち着いた。お互いの意思を距離的に二分した勘定になった。彼女は不服そうな表情をしたが、最終的には納得した。

彼女が言うように新婚旅行も結婚式の一部であるのなら、この旅行を企画した旅行社も種族保存本能維持に対する共犯者だった。

三十四.

飛行機には数組の新婚夫婦がいた。キャリーケースの色は違っていたが大きさは皆同じだった。新婦の服装も色彩に相違はあったがどれも似通っていた。上海のホテルも新婚夫婦はみな同じだった。夕食の場所もホテル内のレストラン、食事の内容も同じだった。ウェイトレスがたどたどしい日本語で言った。

「アルコール類はバイキング方式になっていますから、テーブルからご自由にお取りになってください」

ウェイトレスの笑顔は可愛かった。共産主義と自由主義のコラボレーションがみごとに調和していた。

彼女は一心にハムを食べていた。

「このハムすごく美味しいわよ」

と言って私を誘うと、再び食事に精神を集中した。うつむき加減で食べる彼女の顔の真ん中に不相応な鼻が餅のようにくっついていた。しかし今は鼻の整形など些細なことだ。私は彼女が一心にハムを啄ばんでいる姿を見ながら、養鶏場のブロイラーを思い浮かべた。

現代は超大国アメリカが世界を支配している。人は誰でもメイド・イン・アメリカの自由主義経済というベルトコンベアーに乗せられて、出生から結婚そして墓場まで運ばれて行く。結婚そのものも商品化されているのだ。抗うには余りにも巨大なリバイアサンだった。

私と彼女のアメリカ資本主義式新婚旅行はつつがなく終了した。

三十五.

私たちは、三ＬＤＫのアパートを新居にした。これは私が予め探して契約していた高層アパートだ。八階にあり、市内を一望できた。彼女も満足していた。ここからはお互いの職場もそれほど時間はかからない。私たちの新しい生活が始まった。

恋愛の結末が結婚生活だったが、私は恋愛中ほどのスリル

はなくても、やはりそれにとって代わるものがあると無理に思いながら職場と自宅を往復した。
　ある雨曇りの土曜日の夕方、私はフランスのドラマを見ていた。若い男が波に呑まれて行く。それを見ながらどうすることもできない恋人。そう、このドラマは恋愛を恋人の死で終らせていた。結婚よりははるかにスマートな、そして見る者の感動を呼び起こすみごとな結末だった。
「ねえ」
　ハッと我に返った。いつ傍に来たのか彼女が私に語りかけた。
「私ね、仕事を辞めようかと思うの」
「どうして？」
「あの病院は赤字経営なのよ。医者が次々と辞めていくのよ。待遇が他の病院に比べて悪いんだって」
「でもそれは君とは関係ないだろう？」
「おおありなのよ。ベッド数を縮小するってことが決まったのよ。その一環として精神科も整理の対象になっているんだって」
「じゃあ、カウンセリング部もなくなるの？」
「そうなのよ。それとねえ、実はカウンセリングの仕事って私に向いていないのよ」
「君は望んで心理学を専攻したんだろう？」
「それはそうだけど。でもこのごろつくづくそう思うのよ」
「辞めてどうするの？」
「暫らく家でボンヤリして暮したいのよ」
　私はさらに問い掛ける意欲をなくした。彼女は一日中家にいることになる。私は思っただけでぞっとした。
　女が家にいて家庭を切り盛りして男が外で働いて稼いでくる。そういう家庭が多いことは確かだ。女の性を男が金銭で買う。交換経済に適合しているが一種の家庭内売春だ。要するに経済活動における性差別は正当化され、その差別が隠微になって性が商品化されていくのだ。
　恋愛の一つの結末である結婚を選択した私は、結婚という事象に対してそれほどの期待感はもっていなかった。しかし、恋愛さらには結婚という商品を購入した私は少なくともいくらかの付加価値を期待していた。それは交換経済では当然だ。その付加価値が彼女によって消費されていく。
　「無限の脳の宇宙を見たい」と言った彼女。そんな彼女への誇大な幻想は別れた時にとっくに捨て去っていたつもりだった。それが残っていたのか？
　再会したときの彼女の生き生きとした姿、それに加えて制服姿。その新しい彼女が結婚後も必要だったのだ。しかし彼女には今あるべきはずのものがまったく消え失せていたのだ。彼女の存在は部屋の中を這い回る青虫そのものだった。

三十六．

　私たちは離婚した。結婚して一年が過ぎていた。自らの責任に慄きながら、自尊心に痛手を受けながらの離婚だった。

しかし、自尊心の痛みは私特有の自己防衛であったかもしれない。そう、責任に対する慄きも。いま思えば、恋愛の当初からこの結果を予期していたような彼女との成り行きだった。

結婚してそれほどの時間もたっていなかったし、また私たちには子供もいなかった。だから離婚は容易だった。さらに別れることに対して彼女はほとんどクレームをつけなかった。

結婚に比べて離婚手続きはあっけないほど簡単だった。あの結婚の複雑な手続きは当事者に対して結婚生活を持続させる意図を秘めた社会的に公認された催眠術だった。離婚は身内の忠告も友人のアドバイスも必要なかった。誰の視線も感じなかった。

私は結婚という行為は問題解決を先延ばしするだけで創造的恋愛問題の解決にはならないことを確認した。これが結婚生活から得た唯一の収穫だ。しかし、二人が何の諍いもなく別れたということはお互いにまだ愛が滅失していない証だった。

三十七.

私は今美術館にいる。モジリアニの人物像が私を見ている。悲しい表情で。この悲しさは何なのかいつも考える。モジリアニの一生が悲しい人生だったからなのか？　人生は悲しさに満ちていると言いたかったのか？

私はモジリアニの絵を見ると、ホソアカクワガタ属の一種にモジリアニホソアカクワガタがいたことを思い出す。クワガタマニアの友人が飼育していたのだ。

「スマトラ産だ。高価なんだ」

友人は自慢そうに話した。モジリアニホソアカクワガタは悲しい表情はしていなかったっけ。

なぜホソアカクワガタの接頭語にモジリアニの名称がついたのか分らない。たまたま発音が同じだったのか？　昆虫学者の中にモジリアニが好きなファンがいたから名づけられたのか？　そんなことを思い浮かべながら鑑賞していると、突然肩をたたかれた。振り返ったら彼女がいた。三回目の偶然。

「元気？」

「うん、元気だよ」

別れて一年ほどしか経たないのに、彼女は生き生きしていた。別れるときのあの暗い悲しげな表情はどこにもなかった。私はほっとする。彼女もモジリアニが好きなのか？　一人できたのか？　恋人と一緒に来たのか？　私は彼女の目を避けてあたりを見回す。

「あなたの連れの人、新しい恋人？」

「ただの友人さ」

私は慌てて答える。

「恋人だっていいのよ。私たちはもう他人なんだから」

彼女の態度には余裕があった。私が昔の夫であったということからくる取り乱しはまったくない。私は少し不満だった。別れるときは私が冷静だった。彼女に魅力を感じなくなったことも私が先んじていた。彼女は最初離婚を拒否したのだ。

少なくともあの別れる時点では彼女はまだ私の存在を認めていたのだ。今は私の方に少し動揺があった。彼女の目は好奇心に満ちていた。私の女友人の正体を突き詰めたいという好奇心。

「美しい人ね」

彼女は言う。

「職場の後輩なんだ。モジリアニが好きだというから一緒に来たのさ」

「あら、そう？」

そう言いながら彼女は名刺を差し出した。

スナック・Mと記されていた。

「スナックのママさんになるの？」

「よかったら一度来てよ。おいしいコーヒーを飲ましてあげるわよ」

彼女は私を見てウインクした。

心理学を専攻し「心という広大な宇宙を駆け巡りたいのよ」と言った彼女が、今度はスナック経営に乗り出す。予想もしなかったことだ。まさにコペルニクス的回転だ。しかし彼女にとっては不連続ではないのだ。彼女の表情に戸惑いはどこを探しても見出せなかった。

「友人と会うことになっているの、お先に失礼するわ」

彼女の鼻は顔の真ん中に所有権を獲得していた。そうして彼女の意思表現に一役買っていた。いつものように彼女は中ヒールを履いていた。歩く度に交互に隠れる脚はいまも美しかった。

三十八.

ロラン・バルトは言う「独創性の存在場所は、彼女でもなくまた彼でもない。それは彼と彼女との関係なのだ」と。恋愛中は二人の間には物理的にも精神的にも距離があった。結婚してこの空間はなくなった。独創性は限りなくゼロに近づく。つまりお互いが無機物化した関係だ。私にとって独創性とは自由だ。独創性にはお互いの空間が必要なのだ。その空間を私は自ら縮めていたのではないか？

離婚して彼女との空間は無限の広がりがあった。だから彼女に改めて魅力を感じたのだ。彼女は魅力ある女性なのだ。その魅力が何処から生じているのかはよく分らないけれども。でも確かなことは、私が次の日曜日に彼女のスナックに行くということだ、開店祝いに温室栽培のバラの花を持って。

ふと私は決定論に支配されている自分を見たような気がした。

（完）